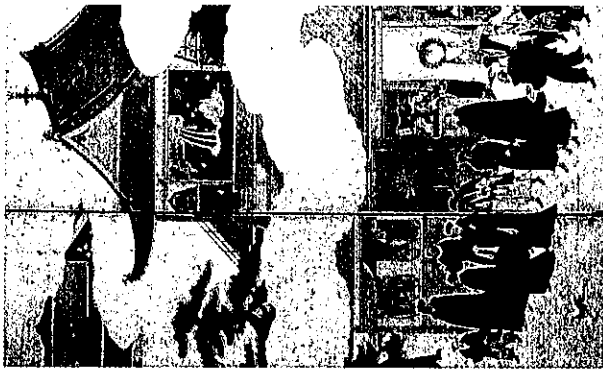


①「聖マリナ」(聖人伝)

後世聖人 尊号を受けて衆士にたのしき眠をとるもの数日の多きに至ると雖も苦痛を好み難を衆む人々のみなるがゆゑに來信者は勿論信徒と雖も時としては是行を見て狂人のしわざとなし指し笑ふ者少からず。然れども是聖人の深き心慮を喜ばざる愚人の致す処のみ何を談するに足るべきや。古來聖人なる者一人として名譽心の爲めに神を信ぜしにはあらず一つには自らの罪罰を償ひ、一つには他人の爲めに神に其身士を祈るにあり今此に



2 狩野内膳画「南蛮屏風」(右隻部分)
1600年頃の作。十字架のある建物に教会。絶ち切らんと思ひ立て置きして往かるべきにあらねば死にやせん角やと思ひ煩ひけるが此行者は女子の入会を厳禁せしかば共に拉へ往くこと能はず是非なく娘は其わたり親戚が許に托し居きて自らは直ちに行者会へと一

て交りぬ。かくて春秋流水のごとくマリナ十七歳となりける年父ウゼノは風の心地とて打臥せしま、終に得起ず、臨終に及びてマリナを枕頭に呼近づけ後々の事とも懇に言置やがて眠るが如く死につけり。マリナは父に別れし身の心かなしく其遺體はなきかなしみてのみありけるが、父が臨終のきはに祈を神に捧げて受得玉ひしと言ふなる我身の行末。此行者の集にありて身を終れよとの玉ひたる父の御言葉かく心よはくは男の集にありて未ばかり知られぬ哉を終へんこと出来得べきかと、自ら自らの心を勵まし憤然として誓を起し、かよき女子の身にて男子の集にたる行者会に難行苦行を甘んじ受けんと決心せしを勇ましけれ。多くの行者等はウゼノの死去せし後は定めてマリナは行者会を脱するならんと心組なし居けるにさはなくて却りて父のありし頃よりも信心一層の度を増したらん如く謹遵謹守を厚く温和柔順なること諸行者中にも其比なき迄なりければ院長は更に云はす諸の行者等一度に驚き感づつ、感ぜざるものなかりき此行者の建てられたる所よりして三重ばかり隔りたる辺に一市街あり行者会の食糧及び諸雑品は皆此処にて買ひ調ふるを常とせりさりながら此便ひとしては非常に道徳堅く温柔なるものならんは能はざることなれば最遠は一高第とも云ふべき行者の任なりしが院長はマリナが至つて温和なるを愛し且つ其道徳のたしかなるを信ぜしかばやがて諸行者と評議の末終にマリナを此

説き出す伝記はかく、内に於て最も面白く最も愉快に快活なる聖人の物語なり。

昔し阿弗利加の國に、ウゼノと稱する人ありけり、妻との中に一女子ありて不足なく此世を暮らしつゝありしが、盈つれば欠くる世の習ひ按半に風の吹かぬものは、一年其妻は夫に先ちて棄ててをく露よりもろく此世を去りしかばウゼノの慨き一方ならず朝夕妻のこのみ思ひなやみて哀みの淵に沈みつゝ、世をあきらめききききければ、そが朋友等大に心をいためさまぐに慰め諒むれども、かへりて是をうさとしていつかな用ふる気色なく、唯部屋にのみたれこめて、鬱々として日を消しぬ。其頃阿弗利加の最と淋しき片山に一の行者会と云ふものありけり。ウゼノは兼ねて耳にせしかば、我も是に入りて濁りたる浮世のきつなを

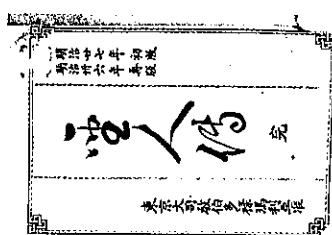
身を投げぬ。かくて亡妻の既も漸く薄らぎしだけに安心の境に立ち行きければ、冬の實、秋の月、親戚の許に托し居きたる最愛の一人娘、妻が片身の面影を思ひ出で、は涙ハラ／＼と膝に落ちて安堵の胸も亦更に震りがちになりていと堪へがたく覺へしかばいつしかに顔に現れたり、院長は此様子をはやくも見てとり、ウゼノに向つて胸の内をうやむや逐一我に話し玉へと懇に問ひかけしかばウゼノは是に答ふる様、己れ一人の子あり、さりながら今は親戚のか、り人となり妻の里にあり。耻しながらそがことを思ひ出で、かくは物思ふ身となりぬと云ふ。院長も深く其心を憐みて根問ひもせず其引取を計したり。かゝりしかばウゼノの悦一方ならず、直ちに自ら出向きて伴ひ來れり、されども女子にては伴ひ來れず故に男の装をしてつれ來り名をマリナと改めさせたり。

ウゼノはかくして一先心を安んじけるが、るにても小供の身にて行者の如き嚴格なる規則を守り得べきかと又々一つの心が、り出來りしが此マリナすこしも嫌々気色なくいとまめくしく働きて朝は早朝に起き出で、夜は更なるを知らず、マリナ此処に來りしより男の形に装ほひしかば女子のたしなみとて重んぜらるゝ、顔のつくり衣服の飾などとなすは思ひもよらぬことを少しもいたふことなく常に男のものごしに扮するを難しとせず勤めて人にととられざるやうになしける。故多くの行者一人として是を女なりと思ふものなく皆男とし

重役に選擧せり。マリナは此重任に當りしを大に悦び我信仰の程を試んは此時なりとて其後は此とにいそしみけり。さる程にマリナは彼市街に度々往くこととて市内の人々に名を知るゝ様になりかつ温和謙遜なるを愛せられて評判市中に高くなり然るに惡魔はマリナの信仰厚きをいたく嫉み、神に乞ふて是に害を与へんことを望めり、神も其信仰の度を試んが爲めにこを教ぜり此に於て惡魔はいたぐ悦喜し己が技量を尽してマリナに害を与へ初めた。此町の魚店に一人の娘あり性甚だ放逸にて所謂スレカラシと云ふなればいつしかマリナの男なり(マリナは女なれ共勇義し居れば誰しも男と思ひり)のよきに思ひをかけ、いかにもして我心に注はせんと自らの家に来る毎に言ひよりけるが、マリナは心におかしく柳に受けて居たりける。娘はしば／＼口説きけれども少しもマリナの従はざるを大に恨みいつか此恨を晴らすべしと考へ居ける。かゝる女なれば間もなく威勇と接連し遂に妊娠したりしかば両親はいたく憤り其相手を白状せよと責めたり。娘は此時こそマリナに恨を晴らす時なりと思ひ相手を行者マリナなりといつぱり告げぬ。両親はいたく憤怒し直ちに行者会に至りて其事を院長に話し、る諸長老は一日もはやく此所を立去らるゝ機取はかられたし我娘は彼人の爲に疵者となれりと談しかけしかば院長大に驚嘆し直ちにマリナを膝下へ呼びよせ厳しく其罪を責めたり、され共マリナは少しも返答

なく只心に神に祈り猶一層の苦みを我身に与へ給へぞと願ひける。院長はマリナの答なきを見て益是を事案なりと誤解し此行者の創立以來はや十数年の久しき間一人のかゝる汚行をなせし者なきに此マリナのみかゝる大罪を犯したること以外の所行なりとて直ちにマリナを行者会より放逐せり。マリナは素より決心せしことながら流石に女子の身なれば、其の遺月此会に住みなれてあらぬ罪を身にかゝりむり出て、行身のいとなしく、幾度となく顧て父の墳墓に還かる心の内ぞいたましき。かくて此を去りし後は淋しき野辺に家とは名のみ雨雲を渡くにも足らざるあはれやを女子の手一つにて漸くしつらひ此所に入りて夜となく昼となく神に祈を捧げ道行く人の爲にも祈りつゝ、三度の食事と思ふまゝ、には食はず只命を保つばかりなるぞ哀れなる。

かゝる可憐なる女にかゝる苦難を与へても惡魔は問題き足れりとなさず、又々一つの苦を与へ



3 斯定聖著「聖人伝」扉「聖人の死」の原本。芥川旧蔵書の1冊でもある。

ける。それは其頃の法律にて若し姦通にて小児出生する時は男児、女児の別なくすべて是を男子の手にて養ふこととなりければ彼の魚店の娘は心大くも妊娠して出生したる小児の親はなれずと其ま、マリンの移住地に持ち行き養ひたり、マリンは是を少しもいはず心よく受取りて眞實の内に養ひたり。是を耳聞くもの誰ありて憐れなりと言ふ者なく昔行者の身として姦通し其児を養へりたる色なくあまつさへ食を人に乞ふとは見るも汚らしき者なりとて是迄のこと知るものは恵を与へることいと紛なし、かゝる幸に少しも恵せず片時



4 「茶話 芥川氏の悪戯」(大阪毎日新聞)1918.10.4
芥川は当時この新聞社の社員として、しばしば小説を連載していた。「茶話」は「大毎」学芸部長で詩人の薄田泣菫が担当した一文芸コーナー。

も神の御名を口に絶すことなく足手まといの他人の足は我身の食を減しても小児には餓を感ぜしめず我身の衣を薄くしても小児には寒さを感ぜしめざる様此淋しき山野を離れず此信用地に落ちたる地を嫌はず幸ひの上に尚ほ苦を与へられんことを切望しつゝ、五十年の星霜を飄飄の内に送りけるは、いともあはれに勇しき忍痛の程をありがたき。

行者会の人々はマリンの忍耐を見、ひたすら罪を償はんとする様を見聞して、いたく哀れを催ふし一同に院長の前に出で、マリンの忍耐のたしかなるをべ、赦免あらんことを乞ひけるが院長はたやすく是を受理がすかぶりをもみふけるが行者等の度々乞ふて止まざるにぞさらば心まかせにせらるべしと許したり、諸行草等は共に悦び直ちにマリンの許に人を走らせ赦免の由言ひつかはしければ、マリンも喜びて其使者と共に来り。され共もとの如く諸行者と同じく住み、諸行者と同じく食するにあらざる、冷も諸行者の奴儀の如く使役すべしと院長は命を下したり。

マリンが行者会に取らりたりし時の有様は実に哀れむべきものあり。其儘かなりし類の肉は落ちて骨を露はし、其凄く引かれたる肩、其白く玉の如かりし肌、紅をさしたる如くなる唇、あざくとして赤かなりし髪、皆草の姿は消えて異人とのみを見めめり。かく其の醜苦みに苦みを重ねて漸く会に取らりたりしかば心の染り、しだひにゆるびて其居二月ばかり経て終に此世を遠逝せり。

マリン死せしと聞へしかば諸行者等人を頼て其死体を洗はせたりしに其折初めて彼の男にあらずして女なりしこと顕れたり。諸行草等は云ふも更なり院長の跡き大方ならず、直ちに死骸の前に往きて地に伏し告知らすして此歳月罪人を告しめしことまことに罪万死に当たりとて大に謝したり。かくて其事あたりに隠れなく伝はりしかば先に属りたる人々皆明なきを耻ぢかつ悔みける。此に聖人を苦めたる魚屋の娘は此ことを聞やいな恐れ戦き忽ち魔の如に魅せられていたくなやみ苦みたり。行者会の院長ははやくも此ことをき、つけいそぎ其娘を伴ひ来りて、マリンの衣服に触れしめしかばやがて腫は退きて娘はもとの身となりたり、此に於て彼は其前非を悔ひ、マリンの死骸の前にて是迄の己がなせしあしきことを、遺す所なく自決せりとぞ、マリンが死後の奇蹟はこれのみならず色々種々の大なる不思議ありしかば時人大にマリンの謙遜にして其熱信の度の非常に驚かりしを責しあひけること。

此マリンの不撓なる大忍耐をもて吾々が日々の行に比せば其差幾何や、まことに愛憎月魔の嘆なき能はず。然れ共吾々亦是をなし能はざるにあらず、驕り細に入り、俗より難に入るの手を守つて、然してこととをば、遂に此マリンの如き大忍耐を成就して聖人の境界を握ることを得べきなり。

◎異界への誘い

一大世紀終わりの長崎。教会を養育されたるおらん(初刊本以降はへろおれんそへに改められた)は信仰厚い少年であつたが、町娘と密通したかとして退放される。一年後の大火事の日に現れたへろおれんは、自分の身を犠牲にして、その娘が生れた赤ん坊を救出するのだが、溺死の彼の焼けた着物からは、なんと乳房が露れていた——『奉教人の死』は、独特の語り口調によつてこのような話が物語られる「二」と、それが〈予〉(芥川龍之介)の所蔵するキリシタン文庫中の説話であることが明かされる「二」からなる。読者の多くは、「二」まで読み進めることで現実世界に引き込まれ、「二」が数百年前の異界の物語であることを改めて実感するだろう。南草文化が栄えたのは、キリスト教伝来から禁制までのほんの数十年。「二」の世界は「資料2」の南草屏風同様、一般にはなじみの薄いエキゾチックな空間となり、そこでは、どんな不思議な出来事もあり得るような気分にさせられてしまふのではない。

◎偽書騒動

だが、「二」の記述は嘘だった。「資料4」「資料5」からは、批評家の内田魯庵が「れげんだ・おれん」の購入を芥川に申し込む、偽書であると知らされたことがわかる。本当の原典は「聖人伝」中の「聖マリナ」(「資料1」「資料3」)で、文庫は別のキリシタン文庫を模して作られていた

のだった(「資料5」)。

単行本『健甕師』(一九一九・一、新潮社)収録の際には左屋の署名も削除され、偽書騒動はすぐに収まったが、この事件は、芥川が技巧を弄し(「悪戯」な作家であることを、人々に強く印象づけた)のだ。

◎背負投け

志賀直哉などは、「二」の展開自体にも(「悪戯」を感じていたようで、『奉教人の死』の主人公が死んで見たら妻は女だったといふ事を何故最初から読者に知らして置かなかつたか、それは読者に「背負投け」を食はすやり方である、と批判している。(『書掛にて——芥川君の事——』「中央公論」一九二七・九)

確かに「へろおらん」が女であることを初めから知っているはずの「二」の語り手は、そのことを最後まで明かさなければいか、ついに一登場人物に焦点化したかのように、「おらん、へろおらん」は女ぢや。へろおれん。と驚いて見せたりする。そしてその上で、その女の一生は、この外に何一つ知られなうに聞き及んだ。なれどそれが、何事ぞとぞうそ。と語るのだ。多くの読者はその語りに誘導されて、へろおれんの前半生からは視線をそらしてしまつたろう。

◎前半生の謎

志賀の指摘を、読者の驚愕と考える方法もある。読者は、語り手を通じてしか小説についての

5 「風変わりな作品二点に就て」

(『文藝雑誌』一九二六・二より)

自分の小説は大部分、現代普通に通ひかゝるる言葉で書いたものである。例外として、『奉教人の死』と『きりしとほる上人伝』とがその中に違入る。両方とも、文藝復興の頃、天草や長崎で出た日本耶穌会出版の諸書の文体に倣つて創作したものである。

『奉教人の死』の方は、其信徒の手になつた当時の口語訳平家物語になつたものであり、(中略)『奉教人の死』を發表した時は面白く話があつた。あれを發表したところ、随分いろいろの批評をかけた手紙が舞ひ込んで来た。中には、その種本にした、切支丹信徒の手になつた、ほんもの、原本を感じてゐると感嘆ひをした人が、五百圓の手附金を送つて、買入れ方を申込んだ人があつた。気遣でもあつたが可笑しくもあつた。

情報を受けることはできないが、その語り手の言葉を疑い、指図に抗つて読むことはある程度可能だからだ。繰り返して読むうちに、この不思議な物語の一切を(知那の感動)という言葉で片づけてしまふとする「二」の語り手に抗して、こんな疑問を浮かび上がらせることもできるだろう。——なぜへろおれんは男裝していたのか、なぜ人々はそのことを見抜けず、女人禁制(「資料1」

【編者略歴】

庄司 達也 (しょうじ たつや)

1961年生まれ。東海大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学。東京成徳大学教授。

主要な業績：『芥川龍之介全作品事典』（共編著、2000.6、勉誠出版）、「芥川龍之介房」論—「新時代」についての考察—（『日本文学』1986.3）、「芥川龍之介の講演旅行」（『湘南文学』1987.3）、「菊池寛「久米正雄宛書簡」翻刻・注釈」（『東京成徳大学研究紀要』2000.3）、「久米正雄 温かな記憶」（『国文学解釈と鑑賞別冊芥川龍之介その知的空間』2004.1）など。

篠崎美生子 (しのざき みおこ)

1966年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学。恵泉女学園大学准教授。

主要な業績：『芥川龍之介 第11巻』（注釈、1996.9、岩波書店）、「芥川龍之介を学ぶ人のために」（共著、2000.3、世界思想社）、「「六の宮の姫君」—〈内面〉の「物語」の探き—」（『文学』1996.1）、「「ところ」—闘争する「書物」たち—」（『日本近代文学』1999.5）、「芥川研究」の文法」（『日本文学』2000.11）など。

日本文学コレクション
芥川龍之介

発行日 2004年5月20日 初版第一刷
2013年5月20日 初版第四刷

編者	庄司達也 篠崎美生子
発行人	今井 肇
発行所	翰林書房
	〒101-0051 東京都千代田区神田保町2-2
	電話 03-6380-9601
	FAX 03-6380-9602
	http://www.kanrin.co.jp/
	Eメール・kanrin@nifty.com
印刷・製本	メダージューム

落丁・乱丁本はお取替えいたします
Printed in Japan. ©Shoji & Shinozaki 2004.
ISBN978-4-87737-189-3

の「聖マリナ」ではそうなっている。また当時のキリスト教は女性の男装を禁じていたとも言われる。教会に入ってしまったのか、へしめおんとておらんとの間に同性愛するおらんから見れば異性愛的感情はなかったのか。容易に答えはでないだろうが、これらの間を通じて、「二」と「聖マリナ」のような本当の（福音伝達の）書との違いを確認することはできそう。

●刹那の感動

一九二八（壬午）年前後に書かれた芥川の小説には、一時の充実感と、平凡で安らかな生涯とを引き替えてしてしまうような人物がしばしば登場する。『威作三昧』（大阪毎日新聞 一九二七・一〇・二〇）、「一四」、『地獄愛』（大阪毎日新聞 一九二八・五・一二）といったこれらの小説を、『奉教人の死』と共に、『刹那の感動』系の小説と呼ぶこともある。だが、『奉教人の死』の場合、『刹那の感動』を味わっているのは誰なのか、よく見極める必要があるだろう。死に傾いたおらん自身に感動はあるのか、それとも感動は、（伴五郎）や奉教人衆のものなのか。だとすれば、それは何に対する感動なのだろうか。ここにも、語り手が曖昧にした問題が残っているように思える。

●切支丹物と語り

芥川には、一六世紀以降のキリスト教信者や風俗を扱った『切支丹物』といわれる一連の小説がある（資料6）。これらの多くは、『王朝物語』（五

〇頁参照）同様、現実離れした物語に依っている。『奉教人の死』の他にも、強著にあこがれる心優しい大男へおらんはすが、折を縫ってキリストの下へとなり、ついに殉教して天に召される語り「きりしとはる上人伝」（『新小説』一九二九・三・五）や、信心深い娼婦へ金花へが、キリスト（と思われる外国人）を客に迎えた翌朝、悪性の梅毒が発病していった喜びを語る『南京の梅毒』（『中央公論』一九二〇・七）など、波乱に満ちた小説が多い。そしてこれらの小説では、まず例外なく、ユニークな語り方法が採られている。それらの語りは、波乱の物語内容と違和感なく読者に伝えるほかにも、大切な役割を果たしている。『奉教人の死』でも、「二」の語り手がへるおらんが女であることを最後まで隠しているからこそ、引き出し、楽しむことができるのだ。（篠崎美生子）

⑥ 主な「切支丹物」

作品名	初出	初刊
蓮草と悪魔	『新思潮』1916.11（原題「蓮草」）	『蓮草と悪魔』新潮社 1917.11
尾形了齋黄え書	『新思潮』1917.1	『蓮生門』阿部陀書房 1917.5
さまよへる猫太人	『新思潮』1917.6	『蓮草と悪魔』新潮社 1917.11
悪魔—小品	『青年文壇』1918.6	『点心』金屋堂 1922.5
奉教人の死	『三田文学』1918.11	『傀儡師』新潮社 1919.1
るしへる	『雄弁』1918.9	『傀儡師』新潮社 1919.1
邪宗門	『大阪毎日新聞』1918.10.23～12.13	『邪宗門』春陽堂 1922.11
きりしとはる上人伝	『新小説』1919.3.5	『影燈籠』春陽堂 1920.1
じゅりあ母・吉助	『新小説』1919.9	『影燈籠』春陽堂 1920.1
黒衣聖母	『文庫倶楽部』1920.5	『夜来の花』新潮社 1921.3
南京の梅毒	『中央公論』1920.7	『夜来の花』新潮社 1921.3
神々の微笑	『新小説』1922.1	『春服』春陽堂 1923.5
報恩記	『中央公論』1922.4	『春服』春陽堂 1923.5
長崎小品	『サンデー毎日』1922.6	『百舛』新潮社 1923.9
おきん	『中央公論』1922.9	『春服』春陽堂 1923.5
おしの	『中央公論』1923.4	『黄雀風』新潮社 1924.7
米女覚え書	『中央公論』1924.1	『黄雀風』新潮社 1924.7
誘惑—或るシナリオ	『改造』1927.4	『湖南の風』文芸春秋社 1927.6
西方の人	『改造』1927.8	生前未刊行
続西方の人	『改造』1927.9	生前未刊行

（注）『大阪毎日新聞』掲載作品は、姉妹紙『東京日日新聞』にも掲載されている。